

# 小学校教師が現職研修に求める機能に関する事例研究

— 体育科の校外研修の参加者に対するインタビューを手がかりに —

村井 潤・木原成一郎・松田泰定・岩田昌太郎・久保研二・徳永隆治<sup>1</sup>  
林 俊雄<sup>2</sup>・藤本翔子<sup>3</sup>・加登本仁・林 楠・大後戸一樹<sup>4</sup>

(2011年10月6日受理)

A Case Study on the Function That Primary School Teachers Ask In-service Training  
— Based on the interview to participants in the training of  
physical education outside school —

Jun Murai, Seiichiro Kihara, Yasusada Matsuda, Shotaro Iwata, Kenji Kubo,  
Ryuji Tokunaga, Toshio Hayashi, Shoko Fujimoto, Hitoshi Kadomoto, Lin Nan  
and Kazuki Osedo

**Abstract:** The purpose of this study is to clarify motivations that primary school teachers choose and participate in-service training of physical education outside school. Besides we propose about the function for which primary school teacher ask the training of physical education. As the result, primary school teachers asked for the following three points as in-service training. First, it is acquiring the knowledge of “new course of study”, and the knowledge in connection with teaching physical education, such as “activities” and a “teaching”. Secondly, it is “making relations with other teachers” who also search for physical education. Third, it is getting to know “the concrete practice example” which other teachers taught. Moreover, the following two points can be considered as a function of the training outside school. First, it is assistance to teachers who cannot receive enough mentoring by the training inside school. Second, it is bringing up of the leader at the training inside school.

Key words: in-service training, primary school teacher, physical education class

キーワード：現職研修，小学校教師，体育科授業

## 1. はじめに

教師の成長は生涯にわたって続く。教師の成長を支えるのは、日々の授業改善と、各種研修である。

教育職員養成審議会(1987)は、現職研修について「日々の教育実践が教員としての力量を高めることは

確かであるが、更に、別の角度からの研修を通じて教育実践の在り方を見直すことも重要であることから、このような研修を組織的、体系的に実施する必要がある」とした。

このような考えのもとに、「初任者研修」や「10年経験者研修」のような「行政研修」や各種「自主研修」が実施される。これらの研修は、主催者は異なるものの、その目的は教員の資質能力の育成である。それでは、これらの研修を通して力量を身につける側の教師は、各種研修をどのようにとらえて、参加しているのだろうか。

<sup>1</sup>安田女子大学

<sup>2</sup>梅光学院大学

<sup>3</sup>広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

<sup>4</sup>広島大学附属小学校

## 2. 研究の方法

### 2-1. 研究の対象

#### 2-1-1. 対象とする研修の特徴

加登本(2011)は、小学校教師が体育指導上の悩み事を解決するために、体育科の校外研修に参加したいという意識を持っているという実態を明らかにした。一方で、そのような意識を持っているにもかかわらず、同僚と相談をしたり、文献やインターネット上の情報をもちいたりして悩み事の解決を図っており、体育科の校外研修を活用していないという実態を明らかにした。これは、小学校教師は体育科の校外研修を何らかの要因により受けることができていないということを示している。この要因については更なる研究が必要となるが、その要因の一つには、教師の多忙化が挙げられるだろう。

また、鈴木(2010)は、「体育科を中心研究教科としている」小学校教師が「体育科授業研究会」に求める機能には、「同僚性・関わり」「指導者からの評価」「指導技術向上」「教科内容の追究」の4つがあることを明らかにした。この結果は、教師が各種研修に求めている機能は、教師としての資質能力を高めることにとまらないことを示している。

しかし、鈴木(2010)は、小学校教師が「体育科授業研究会」に求める機能を明らかにしているが、小学校教師が、なぜそれらの機能を「体育科授業研究会」に求めているのかを明らかにしてはいない。

加登本(2011)が指摘するように小学校教師は、校内で同僚に相談したり、文献等を活用したりして悩み事の解決を図っている。このような教員同士のかかわりは、校内研修においてなされるはずである。つまり、校内研修も「同僚性・関わり」や「指導技術向上」「教科内容の追究」という機能を有しているとも考えられる。それにもかかわらず、なぜ、小学校教師はそれらの機能を校外研修に求めているのであろうか。

本研究では、M市の体育部会が主催する校外研修を事例として、小学校教師が体育科の校外研修を選択して参加する要因を明らかにすることを目的とする。そして、研究の結果から、体育科の校外研修に求められる機能について提案する。

本研究が対象とする研修は、M市教科研究会体育部会が主催する、実技を中心とする研修である。この研修には部会に所属するM市の教員が参加する。したがって、加登本(2011)の「悩み事に対する解決方法」のうちの「地区の研究会」にあたる。毎年度の最初、M市の全公立小学校の教諭は一つの教科を選んで教科研究会に所属する。各教科部会の部会長はM市校長会から派遣された校長が就任する。体育部会には各小学校より1から2名程度の教諭がこの部会に参加する。継続して参加している会員と数年で入れ換わる会員から構成されている。

体育部会は毎年以下の3つの研修を実施する。1. 春の放課後に実施する年度最初の会員の確定と年度計画の合意の会議。2. 夏季休暇中の1日終日を使った実技研修会。3. 秋又は冬に行う会員による授業公開とその授業に関する批評会の研修。これらの研修の時間は教育委員会により勤務時間内に保障され、授業公開の研修は全市一斉に児童を下校させて各教科の部会で行われる。

対象の研修は、上記の夏季休暇中の1日終日を使った実技研修会であり、「運動が苦手な子をできるようにする楽しい体育実技研修～体育で困っている先生のお悩み解決します～」と題して実施された。また、内容について「今年はゲーム領域と体づくり運動を中心とした実技研修を行います。2学期の授業作りに生かしていきましょう。M小学校C先生の県小体での提案内容の模擬授業も予定しています。」と説明された。

参加者の属性を表1に示す。参加者の属性は、性別、これまで主にどの学年を担当することが多かったか(担当学年)、研究教科は体育科かその他か(研究教科)、体育主任の経験の有無(体育主任)、在職年数は何年か(在職年数)、研修を開催している部会にのべ何年所属しているか(所属年数)について調査した。

表1 参加者の属性

性別	担当学年	研究教科	体育主任	在職年数	所属年数
男性	低学年	体育科	ある	5年以内	1年以内
				6～10年	2～5年
	11～15年			6～10年	
女性	中学年	体育科以外	ない	16～20年	11～15年
	高学年			21年以上	16～20年
	10			7	21年以上

n = 19 (項目/人数)

## 2-2. 資料の収集と分析の方法

本研究は、対象とする研修の参加者全員に対する質問紙調査と抽出した参加者に個別にインタビュー調査を行った。

まず、質問紙調査では、研修の参加者に表1に示す設問に自由記述で回答させた。参加者のうち19人から回答を得た。この質問紙は、参加者が研修を通して学習しようとした内容について明らかにすることを目的とした。

この目的に即して、収集した資料のうち、参加者が対象の研修で学びたいと考えていることを示すと考えられる、「1. どのようなことを学ぼうと考えてこの部会に参加しましたか。」と「4. 今後この部会の活動でどのようなことを学びたいと思いますか。」について、分析者1名が帰納的に分類した。

なお、各項目に記述された内容が、複数の内容を含んでいると考えられた場合には、それらを分けて分類した。また、「今までと同様」といったように、何について学習しようとしているのか解釈不能なものは分類の対象から除外した。

分類の結果は、研修を参観した大学教員1名と大学院生2名及び研修を参観していない大学教員2名と小学校教師1名が検証した。検証では、まず、帰納的に作成した第1カテゴリーとそこに分類された記述に対応があるかを検討した。対応がないと判断した場合には、その記述を削除した。次に、分析者と検証を行った6名の計7名が協議を行い、第2カテゴリー及び第3カテゴリーを検証した。検証の結果、疑義が生じたカテゴリー名や第2、第3カテゴリーの分類は合意が得られるように修正した。

次に、インタビュー調査では、質問紙調査の結果を

表2 質問紙の設問項目

1. どのようなことを学ぼうと考えてこの部会に参加しましたか。
2. この部会でどのようなことを学ぶことができましたか。
3. この部会で学んだことがどのようなことに役立ちましたか？または役立てたいとお考えですか。
4. 今後この部会の活動でどのようなことを学びたいと思いますか。

踏まえて、研修に対する参加者の意識をより詳細に明らかにすることを目的とした。

この目的を達成するために、次の特徴を持つ参加者にインタビューを行った。まず、教職年数が短く、研修を主催する部会に所属して1年目の教師A(教職2年目)、教師B(教職2年目)、次に、継続して長期間参加し、研究会で模擬授業を実施した教師C(教職17年目)、そして、研修の指導者的役割を担う教師D(教職22年目)である。

インタビューは、「半構造化インタビュー」(メリアム, 2004)を用いて個別に行った。インタビューの質問内容を表3に示す。表3に示した質問内容は、質問紙調査の設問を利用するとともに、対象者の研修の状況を把握するために、教師の研修の経験(質問1)と校内研修の状況(設問2)を設定した。また、研修の指導者的役割を担う教員に対するインタビューでは、上記の質問に加えて、指導者として参加者に伝えたい内容を尋ねる質問(小項目5)と指導者としての困難を尋ねる質問(小項目6)を設定した。

インタビューの解釈に際して、第1に、インタビューの逐語録を作成した。第2に、分析者は「教師は何を求めて研修に参加するのか」という問いを設定し、逐語録の文章から問いの「何を」に当たると考えられる部分を抽出した。第3に、抽出した内容を端的に表す見出しを作成した。第4に、抽出した内容を質問紙調査の分類結果を用いて分類した。第5に、質問紙調査の分類結果に当てはまらない内容について、その見出しを帰納的に分類した。第6に、「『何を』に当たる内容を、なぜ校外研修に求めるのか」という問いを立て、逐語録中の「何を」に対応する「なぜ」に当たると考えられる内容を検討した。

以上の手続きを分析者1名が行った。逐語録の各問いに関わる内容の抽出について、対象の研修を参観した大学教員1名と大学院生2名、研修を参観していない小学校教員1名の計4名が、その妥当性を検証した。検証の結果、4名の同意が得られなかった内容は、解釈の対象から除外した。

表3 半構造化インタビューの設問

大項目	小項目
1. どのような研修に参加してきましたか。	
2. 勤務校での体育授業の校内研修について。	
3. 体育部会に関する研修について。	(1)どのようなことを学ぼうと考えてこの部会に参加しましたか。 (2)この部会でどのようなことを学ぶことができましたか。 (3)この部会で学んだことがどのようなことに役に立ちましたか。または役立てたいとお考えですか。 (4)今後この部会の活動でどのようなことを学びたいと思いますか。 (5)この部会の活動で指導者としてどのようなことを参加者に伝えたいですか？ (6)この部会の活動で指導者として困ったことはありませんか。

†(5)と(6)は指導者的立場の教員に対する設問である

### 2-3. 調査時期

本研究の対象とする校外研修は、2010年8月4日に実施された。質問紙調査は、研修終了後に実施し、質問紙は当日回収した。インタビュー調査は、教師A、教師B、教師Cについては、質問紙調査実施後に行い、教師Dについては、2011年1月8日に行った。

「新学習指導要領」とは、2008年に告示され、2011年から全面実施される学習指導要領で新しく取り上げられた内容を学びたいとする記述からなっている。このカテゴリーが出現したのは、調査時期が2010年の1月であったため、翌年度から全面実施される新学習指導要領と1999年告示の学習指導要領との違いを理解する必要があったためだと考えられる。

## 3. 結果と考察

### 3-1. 質問紙調査の結果と考察

質問紙調査の結果、1と4の設問について34の記述が得られた。帰納的分類の結果を表4に示す。

帰納的な分類の結果、参加者が研修を通して学びたいと考えている事柄は、大きく分けて「新学習指導要領」と「教材」、「授業」という3つの内容があることが明らかになった。

「教材」とは、「運動領域全般」や「体づくり運動」など、学習指導要領の領域に則して、それらの領域に含まれる運動について学びたいとする記述からなっている。また、「授業」とは、「授業づくり」や「指導方法」、「授業の進め方」などのように、授業を実施するために求められる具体的な知識を学びたいとする記述からなっている。

「教材」や「授業」といった内容は、文献等にも示されている内容ではあるが、文献に示された文書を読

表4 質問紙の帰納的分類結果

第3	第2	第1	記述	
		新学習指導要領	今、どのようなことが求められているかを知り、それに役立つものを学びたい 新しく入った競技	
教 材	運動領域全般		更に色々な領域の運動や実践を学びたい すべての領域の内容を把握し、(子どもたちに達成感を与えられるようにしたいです「特に苦手な子への指導法」) 様々な運動について	
		体づくり運動	体づくりに繋がるゲーム要素をもった動き 体ほぐしの方法と効果 体づくり運動の種類 体づくり運動の種類を広げる すぐに使える体づくり運動	
	ゲーム	ゲームと基本の動き すぐに使えるゲーム	ゲームとその基本となる動きの関連 (すぐに使える)ゲーム	
		器械運動・陸上運動につながる動き	器械運動、陸上運動につながる動きづくり	
	授 業	授業づくり	楽しい授業づくり	楽しい体育 楽しく体育を学ぶための授業づくり 楽しい授業づくり
			体力を高める授業づくり	授業づくり。体力をどう高めていくか。
			苦手な子が楽しめる授業づくり	運動が苦手な子どもも楽しめる体育の授業づくりをしたいと思ったから。
体育好きにする授業づくり			子どもたちが体育好きになれる授業づくり	
指 導	指導方法	授業の組み立て	体育の授業の組み立て方 できない子をできるようにしていく授業の組み立て どのように児童に色々な動きをさせるか。	
		充実した指導方法 (すべての領域の内容を把握し、)子どもたちに達成感を与えられるようにしたいです「特に苦手な子への指導法」		
	ねらいを身に付けさせる指導	子どもたちが楽しめ、その中で教師が付けたい力をつける実践をたくさん 学びたいと考えたからです。		
	教授技術	場づくり、意図的に遊びを通して狙いとする動きを行う指導 体育の授業技術		
	授業等に役立つ内容	日常の体育授業、体育朝会、特活等で生かしたいため。 日常の体育で使える運動を学びたいので。体育の研修の場が少ないので、ここでの学びは貴重です。 体育の授業に役立つ内容 実際に体育で役立つものを学ぼうと思って 実技の中で子どもたちの運動に取り入れたい。 実践に生かせる学習内容を具体的に。体を自ら動かす研修はとても参考になります。		
	授業の進め方	体育の授業の進め方 体育の授業の進め方について 実践している場面		

†第1、第2、第3は作成したカテゴリーの水準を示す。‡( )内の記述は、異なる第1カテゴリーに含まれることを示す。

み、内容を理解しただけでは授業に活用することが困難である。なぜなら、「教材」や「授業」は子どもの技能や学習に対する意欲の実態など様々な要因によって変化させる必要があるためである。

例えば、「教材」に含まれる第2カテゴリーである「体づくり運動」は「体づくり運動の種類を広げる」といった記述からなる。この体づくり運動の種類は、文献を読み体づくり運動の種類を知れば、授業で実施することができる。しかし、文献で学習するだけでは、実施する運動が個々の教師の担任する子どもたちの運動能力の実態に対して適切な内容であるか判断できない。

また、「授業」に含まれる第1カテゴリーである「楽しい授業づくり」は「楽しく体育を学ぶための授業づくり」といった記述からなる。この「楽しい授業づくり」は一つの正解があるわけではなく、運動の解釈の仕方によって多様な展開で実施することができる。

例えば、陸上運動領域の短距離走を取り扱う場合、他者と競争する楽しさや記録を達成する楽しさなど、短距離走の楽しさには様々な解釈が存在する。これらの運動の解釈について知ることは意味があるだろう。しかし、運動の解釈に基づいて授業を実施するためには、目の前の子どもの運動に対する思いや学級の風土などの状況を踏まえながら、実際の授業展開や教材として具体化していかなければならない。

このように、子どもの実態等に応じて変化させる必要がある「教材」や「授業」に関する知識について、校外研修を通して身につけることは、校外研修の重要な機能であると考えられる。

さて、加登本(2011)は、小学校教師が体育指導上の悩み事を解決するための活動として、「校内の同僚の先生に相談する」が70.7%を占めるとともに、「専門書・雑誌を読んで勉強する」が49.5%、「インターネットのホームページを利用する」が46.9%を占めている

表5 「何を」に関わる抽出部分の分類結果

カテゴリー	見出し
新学習指導要領	現在の体育に求められていること
教材	場づくり・教材についての知識
	運動の正しい体の使い方
	スモールステップの知識
	教具の活用方法
授業	指導のポイント・アイデア
	高学年のボール運動の指導方法
他の教師の実践事例	体の動かし方や空間の使い方に対する個別指導の内容
	個別の教師の具体的実践
	個別の教師の具体的事例
	個別の教師の具体的事例
	個別の教師の体育嫌いを体育好きにさせる授業づくりの具体的事例
	授業に関わる考え方を再考するための材料
他の教師とのつながり	体育科について話をする先生とのつながり
	自分の授業に対する意見
	体育科に対する情熱

ことを示した。

質問紙調査で明らかになった、参加者が研修を通して学びたいと考えている事柄である「新学習指導要領」や「教材」、「授業」に関する内容は、文献で自習し、同僚と議論をすれば、学ぶことができるとも考えられる。それにもかかわらず、なぜ、校外研修で学ぼうとするのであろうか。インタビュー調査の結果から、その理由を事例的に考察する。

### 3-2. インタビュー調査の結果と考察

インタビュー調査の結果、4名の教師の逐語録から「何を」に関わる発話が16個抽出された。これらのうち、「新学習指導要領」と「教材」、「授業」に当てはまる内容が計8個あった。そこで、当てはまらなかった8個の内容について帰納的に分類した結果、発話の内容には「他の教師の実践事例」と「他の教師とのつながり」という内容があった。

「他の教師の実践事例」は、他の教師がどのように具体化しているのかという具体例を求めていることを示している。また、「他の教師とのつながり」は、参加者が体育科について他の教師とかかわりを持つこと自体を求めていることを示している。

さて、参加者が校外研修に「他の教師の実践事例」や「他の教師とのつながり」を求めるということは、校内研修を含む日常の業務を通じた体育科についての同僚との関係に不十分さを感じているということを示唆している。以後、「他の教師の実践事例」と「他の教師とのつながり」を「なぜ」校外研修に求めるのかを事例的に検討していく。

#### 3-2-1. 教師Aと教師Bの事例

教師Aと教師Bは、正規採用2年目の教師である。初任教师は初任者研修を行うが、教師Aは初任者研修や初任時に受けた指導について、次のように回想している。

(初任者研修は)ほとんどが主要教科だったので、体育についてはあまり。初任研で(体育科の授業を)するっていうのも「なんで？」って。体育は初任研ではあまり。1, 2時間くらいしかやっていません。(教師A)

このことから、教師Aは初任研において体育科の指導をほとんど受けていないことがわかる。また、教師Bは、初任研で受けた指導について、次のように回想している。

集団を動かすという意味では、色々とレクチャーを受けたんですけど。「こういう時には、こういうサインを出したらいい」とか、「こういう合図を出

したらしい」とかはあったんですけど。(教師B)

このことから、教師Bは、初任研において体育科に関わる指導を受けてはいるものの、その内容は非常に限定的で、授業のマネジメントにとどまっていたことがわかる。

加えて、インタビューの中で教師Aは、勤務校には体育科に研究的に取り組んでいる教師がいないことや、体育授業の校内研修が一度も開かれていないことを述べている。また、教師Bも体育科の校内研修がほとんどなく、勤務校では同僚の教師と体育科について話す機会がほとんどないということを述べている。つまり、初任者研修のみならず、日常的な同僚教師とのかわりの中で、体育科について指導を受けることができていない状況が予想される。

以上のことから、教師Aと教師Bは、体育科の指導の力量不足を感じているにもかかわらず、体育科についての指導を充分に受けられなかったと認識していると考えられる。

このように、体育科についての指導を受けられない状況におかれた2名の教師は、体育科の指導力量の不足を次のような方法で補おうとしている。

今は誰かに聞くっていうよりは、色んな本を読んで、(中略)「何か面白そうなのないかな?」って見たり。(中略)そういう事をしながら、聞くというよりは自分で色んな情報を集めてやってる感じです。(教師A)

(前略)だいたいネット調べのことが多いですね。あとは、体育の担当でもあるので、色んな雑誌が回ってくるので、それをパラっと見ながら、「何かないかな」って調べたり。(教師B)

このように、同僚の教師から指導を受けにくい環境におかれている教師Aと教師Bは、文献やインターネットの情報を活用し、自身の授業力量を高めようと努力している。しかし、教師Bが次のように述べるように、文献やインターネット上の情報をそのまま授業で活用することは困難である。

(1年目は)自分なりに調べながらやってただけだったので、子どもにも申し訳ないなと思いがらやあって。先生たちに教えてもらおうと、ネットを見るのとでは全然違うので。(インタビュアーがどう違うのか尋ねると)具体的に、こっちも質問しながらできるし、「そこはどういうことなんですか?」って感じで質問できますし、教え方にも、具

体的に、「あそこを見て」「頭はここに乗せる」とか、そういう言葉で言って下さるので、子どもたちに伝わりやすいような言葉でやってるので。

文献やインターネット上の情報である「教材」や「授業」に関わる知識は、教師が置かれた学校の環境や子どもの実態などを踏まえて、実際に行う授業として具体化しなければならない。しかし、「教材」について文献で調べながら授業を進め、子ども理解も十分とは言いつれない状態の若手教師にとって、それらの知識を目の前の子どもたちに応じて修正することは容易なことではないだろう。

「教材」や「授業」に関する知識は、実際に授業を行ってみて、その授業を反省することで、具体化するための要点を理解することができる。このような、日々の授業をふり返りながら、より改善していくという教師の姿勢は非常に重要なものである。しかし、すべての教師が同じ失敗を繰り返しながら授業を改善していく必要はない。一人の失敗や成功の経験を皆で共有すれば、失敗は繰り返されずに済むはずである。

若手教師は熟練教師と比較して、授業を実施した経験が少ない。その分、同じ教材を実施しても、熟練教師よりも失敗することが多いだろう。しかし、子どもへの影響を考えれば、できるだけ失敗を避ける方がよい。だからこそ、若手教師は熟練教師から具体的事例を基に指導してもらい、熟練教師の経験から学ぶ必要がある。

このように、教師Aと教師Bは、体育科について指導を受けにくい状況におかれているため、体育科の指導を受けるために、「他の教師とのつながり」や「他の教師の実践事例」を校外研修に求めていると考えられる。

### 3-2-2. 教師Cの事例

インタビューの逐語録から、教師Cが「何を」求めているかの抽出した結果、教師Cは他の教師からの「自分の授業に対する意見」を求めて研修に参加していた。

教師Cは、インタビューにおいて、体育科を中心にした学級経営を行いたいと考えながら、実際には行えていない現状を次のように述べた。

(体育は)学級経営とすごく密接に繋がってると思うから、すごく大事にしたいんだけど、実際問題、例えば、S小学校だと算数の研究校だし。算数にガーっと、学校が行きますよね。なかなか。自分が授業をしますって言うんだったら、その時に色んな文献を読んだり、色んな先生に聞いたりして、教材研究もできるんだけど、普段だとなかなかそこま

で。(中略) 体育をメインにいきたいけど、学校にいる時は個人の研究でとまっていた、勤務校にいる時にはチーム組んでできないじゃないですか。

このように、教師Cは、体育科を重要視し、体育科について同僚とともに研究を行いたいと考えながら、学校の状況によって、その望みがかなわない状況にある。

しかし、そのような状況におかれながら、教師Cはどうかして体育科の重要性を同僚に伝え、勤務校とともに体育に取り組む教師を作ろうとしている。教師Cは次のように述べた。

外の研修とかで習ったことは、Sの時は毎年、実技研に入れてもらってました。私が指導する側で、先生たちに。今日やったような体づくりとか多様な動きとか、ああいうのも去年までは夏休みに1本とか。校内で体育をやって欲しいから。

このように、教師Cは体育科の校内研修に取り組む機会を自ら作りだそうとしている。校内研修での取り組みは、勤務校の教員団の体育科の指導力量の向上に有効に働いたと予想される。

ところが、体育科に研究的に取り組む状況にない学校の校内研修では、指導者役の教師が提案した内容を参考に、各教師がそれぞれの学年や学級に当てはめて実施するという構造があることが予想される。すると、指導者役を担う教師Cが提案した教材解釈等は、校内研修の参加者に参考にされるのみであり、その妥当性を問い直されるという機会が少ないと考えられる。

それに対して、対象の研修について、教師Bは次のように語った。

ああいうふうに、立場も関係なく、ざっくばらんに「こうしたらいい。ああしたらいい」っていいながら、体育の1つの授業を組み立てていくっていうので、始めにC先生がやろうとしたものと、最後は全然形が変わったので、みんな「よかったね」っていう感じで終わっているところが、やっぱりやりがいがあるよなって思っ。

このように、教師Cは対象の研修で授業を提案することで、参加者から様々な意見を受け、提案した内容を改善しているのである。これは、対象の研修がそれぞれの立場を相互交渉させる対話の場になっていることを示している。

教師Cの実施する校内研修での活動が、提案者から参加者への一方通行の関係であると予想されるのに対

し、対象の研修は提案者と参加者の双方向的なかかわりを築いている。このような、各自の授業力量を高める双方向的なかかわりを求めて、教師Cは対象の研修に参加していると考えられる。

### 3-2-3. 教師Dの事例

教師Dは対象の研修の指導者的役割を担っている。教師Dは研修で学びたいこととして、次のように述べた。

一つは、自分の授業に生かせるというか、学ぶところがあります。授業を見たり、話を聞いたりして。後もう一つは、自分が伝えていく立場になったときのこと、実態が違うから、僕が頭で考えて学んできたことが全てじゃないなというのがわかることです。伝える時でも、その実情を色々と考えながら伝えていけたらいいなというふうに思っ(後略)

このように、教師Dは、自身の授業改善と、指導者として他の教師を指導するために、「他の教師の実践事例」を知りたいと考えていることがわかる。教師Dは対象の研修の指導者の立場であるため、特に指導をするために必要な知識を求めていると考えられる。

それでは、なぜ、教師Dは他校の教師に体育科について教えることにこだわるのであろうか。研修の指導者という立場もあるが、教師Dは自身の初任期について次のように語った。

体育朝会をやっている学校だったのですが、最初の年に体育主任の先生が体育指導について色々見せてくれたりしました。全体の動かし方や運動会やマラソン大会などの学校行事を見せていただいて、それにつながる授業というのを勉強させてもらいました。(中略) 見て学んで、聞いて学んでということを中心掛けていました。

これは、教師Dが校内での教え合いの重要性を実感していることを示している。しかし、教師Dは現在の学校の状況について、次のように述べた。

ただ残念なのは、現場で体育を専門にしている人はほんの一握りです。いない学校もあります。他の専門の人たちに「体育の専門になって」とは言えません。他の教科は他の教科なりのこだわりがあるし、僕が体育を大切にしている分だけ図工や家庭科でも教科の存在意義をすごく示して、それを中心に研究されている人もいるからそれを蔑ろにすると失礼になると思っ(後略)、「絶対に体育をやっ(後略)」とは言えません。

小学校は学級担任制であり、基本的に教師はすべての教科を担当する。しかし、各教科について同等に追究することは困難であるため、教師は自身の得意な教科や領域について追究することとなる。教師Dは多くの教師に積極的に体育に取り組んでもらいたいという願いと、それぞれの教科を追究することの重要性の理解の板挟みの状態にあると考えられる。

そのような状況の中、小学校教師に体育科の授業力量を身につけていってもらう方策として、D教師は次のように述べた。

そうならば、その人たち（体育を専門としていない教師）に広げてもらうには僕の窓口は体育部会の先生なので、「体育部会でこんなことを教えてもらったからやってみて」などと学年の中で話をしてもらったり、誰か近い人に広げてもらうのはすごく嬉しいのでそれも一つかなと思います。

このように、教師Dは、各学校で積極的に体育科に取り組んでもらうための方法として、校内での教え合いに着目し、校内研修を担う教師を育てようとしている。そして、その役割を担う人材を育成するために「他の教師とのつながり」を求めていると考えられる。

先に検討した教師Cは、継続的に対象の研修に参加し、自身の授業力量を高めるとともに、校内研修において指導者的役割を担っている。教師Cのような「他の教師とのつながり」をもつことが、教師Dのねらいであると考えられる。

### 3-3. 校外研修に求められる機能

教師A、教師Bからわかるように、若手教師は校内の同僚教師からの指導を求めている。また、若手教師にとって、気軽に相談でき、見本を見せてくれる校内の指導者は非常に重要な意味を持つ。よって、各学校に、指導者的役割を担える人材が必要なのである。

教師Cや教師Dは、自らを高めるとともに、校内研修を組織し、他の教師に体育を教え、広めていこうとする意識が高い。このような教師を中心として充実した校内研修を実施できるのであれば、校内研修において、体育科の授業の力量を身につけることができるであろう。

このことから、それぞれの教師が得意分野の校外研修を受け、校内研修の指導者たり得る力量を身に付け、校内研修を実施していく必要があると考えられる。

以上をまとめると、体育科の校外研修に求められる機能として、次の2つが挙げられる。一つは、体育科の校内研修等が充実しておらず、必要な力量を身につける機会に恵まれなかった教師に対する援助である。

もう一つは、体育科の校内研修の指導者的役割を担う人材を育成することである。

## 4. まとめ

本研究の結果、対象の研修に参加した小学校教師が、研修に求めている内容には、次の3点があることが明らかになった。それは、第1に「新学習指導要領」や「教材」「授業」といった体育科に関わる知識を得ることである。第2に、体育科をともに探求する「他の教師とのつながり」を作ることである。第3に、つながりをもった他の教師が実践している「具体的な実践事例」を知ることである。

また、校外研修の機能として、次の2点が考えられた。それは、第1に、校内研修で十分な指導を受けられない教師に対する援助である。第2に、校内研修の指導者の育成である。

## 【付 記】

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤B）課題研究番号21300221研究代表者・木原成一郎の補助を受けて行われた。

## 【引用・参考文献】

- 加登本仁(2010)教員研修の現状と課題. 梅野圭史ほか編 教師として育つ. 明和出版:東京, pp.20-24.
- 加登本仁・松田泰定・木原成一郎・岩田昌太郎・徳永隆治・林俊雄・村井潤・嘉数健悟(2010)体育授業の悩み事に関する調査研究(その1)一教職経験に伴う悩み事の差異を中心として一. 学校教育実践学研究, 16:85-93.
- 加登本仁・松田泰定・木原成一郎・岩田昌太郎・徳永隆治・林俊雄・村井潤・嘉数健悟(2011)体育授業の悩み事に関する調査研究(その2)一悩み事の解決方法を中心として一. 学校教育実践学研究, 17:169-174.
- 教育職員養成審議会(1987)教員の資質能力の向上方策等について(答申).
- メリアム:堀薫夫・久保真人・成島美弥訳(2004)質的調査法入門一教育における調査法とケース・スタディー. ミネルヴァ書房:京都.
- 鈴木聡(2010)小学校教師の成長における体育科授業研究の機能に関する研究一体育科授業研究会に参加する小学校教師の意識調査を手がかりとして一. 体育科教育学研究, 26(2):1-16.